A Locus of 先人の軌跡 Predecessor

若松 常一郎（つねいちろう）

戦後山国川の水防改修に
私財と余生のすべてをかけた

治水事業で人々に、希望と勇気を与え
中津市民に山国の護りと讃えられた

［中津市］
元中津商工会議所会頭
若松木材初代社長

永松　秀敏（ながまつ）
（元大分合同新聞文化部長）
Hidetoshi Nagamatsu

淺田　展弘（あさだ）
Nobuhiro Asada

写真出典：国土交通省大分工事事務所地域建設技課発行「連携のための山国川の川しるべ」

山

国川は、修験者の山・英彦山（ひこさん）を源流に56キロの旅を終えて周防灘に注ぐ。昔「耶馬の流れの水清く…」と歌にもうたわれた大分県を代表する一級河川。途中、神海和尚（かいおしょう）で有名な青の洞門や大岩壁の名勝競秀峰（けいしゅうほう）、八連の美しい石橋（ねじれまがり）など川の流れをネットワークにした流域の景観は、頼山陽（らいさんよう）の筆を待つまでもない。

久しぶりに山国川を訪ねた。山国大橋の右岸に立つとはるか八面山を望み、穀倉地帯・沖代（おきだい）平野を潤しながら悠々と流れる大河の流れは、まさに母なる川そのものだ。王者の風格さえ感じられる美しさであった。満々と水をたたえた川の流れは、国の流れに、つまり治水が国土の死命を決すると言っても過言ではない。

しかし、恵みをもたらす母なる大河も、一度怒れば取り返しのつかぬ大災害を引き起こす。川は昔から極めて付き合いにくい相手でもあった。水を治めきれば名君とたたえられ、失敗すれば国が滅びる。そんな事例は江戸時代にさかのぼるまでもなく枚挙にいとまがない。

山国川の源流は標高1,000m、総延長の割には高低差の激しい川。しかも上流は溶岩質。降雨の吸収率が極めて低く、降った雨は一気に下流に。江戸の昔から洪水の絶えない暴れ川であった。中でも未曾有の大水害をもたらしたのは1944年（昭和19年）9月の大水害。金谷（かなたに）の堤防が決壊、中津市を海中に押し流さんばかりの大惨事となった。

この時、中津市議でもあり、幅広く材木商を営む若松常一郎が立ち上がった。彼は病弱な市長に代わり、国の直轄事業で改修を…と内務省（旧建設省、現国土交通省）に陳情に向かう。終戦直前の国の疲弊しきった最悪の時期、中央官庁の側もほろろの対応に屈せず、全て私費で50回近い上京をしている。その彼に中央の役人が付けたあだなが「山国さん」。このままでは「中津」が駄目になる。あと5cm水かさが増せば全市流失の危機に。思いあぐんだ若松は一策はバカと言われようと山国川の水防に資産と余生を投じようと決心した。

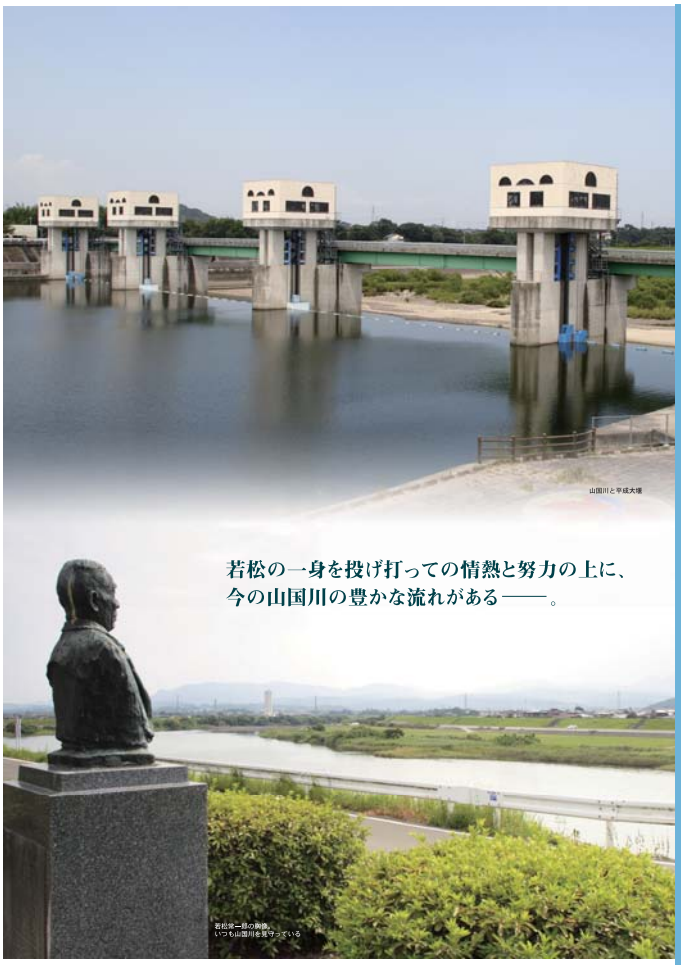
ほぼ完成した金谷堤防の築堤工事の様子（昭和２５年５月）
堤防下には、資材運搬用のトロッコ用軌路が敷設されている

牛馬車で運ばれてきた材木

黄綬褒章を受章した際に皇居にて記念撮影

当時、材木は川を下って運ばれていた。
材木を川に流すための申請書

**山国川の国営改修の陳情に
50回以上私費で上京。
国の役人から「山国さんが来た」
と言われるほどに。**



**若松の一身を投げ打っての情熱と努力の上に、
今の山国川の豊かな流れがある――。**

改修既成同盟会や大分県治水会の役員になったのもこの頃。終戦後も彼の信念は変わらず、立ち上がった長期離脱列車に揺られての上京は続く。熱意にほだされた建設省はついに折れ、昭和23年、堤防本格改修を国の直轄事業で着手することを決めた。総工費約10億円。当時としては破格の措置であった。

若松の一身を投げ打っての情熱と努力と言っても過言ではない。若松は、中津商工会議所会頭を5期務め、中津経済の発展に大きく貢献する、専務理事で仕えた橋松宗氏（故人）は、回顧録の中で「山国川改修では体力と財力を消耗するほど真剣でした。人間の評価は物事の本質を洞察出来るかで決まる」と若松氏をしのぶ。

諸（もろ）町の自宅に婿養子の若松舜兒（しゅんじ）、千里（ちさと）夫妻を訪ねた。舜兒氏は、稼業の中津木材相互市場は長男に譲り今は会長職に。舜兒氏は語る。先代は山国川を隔てた対岸の福岡県吉富町生まれ。生家は海上輸送の小型船を持つ親族と同経営の小さな材木商だった。両親の死去を機に独立、関東大震災の二ニュースが飛び込み上京。深川の木場に出張所の看板を上げ、九州の木材を送り込み、復興に役買ったというエピソードが残る。「人のために尽くすことがいつかは稼業にもはねかえる」といつも言ってました。苦労人でした」と。

戦後、国による山国川流域の本格的改修が始まったのは、若松が心血を注いだ金谷堤防大改修がきっかけであった。あれから60年、最近では平成2年完成の中津市と福岡県新吉富村を跨ぐ本格的な可動式の平成大堰と治水事業は近代化の歴史を重ねていく。しかし、江戸時代、三口大井手堰に見るように人柱で沖代平野8,000石を守った尊い犠牲もあった。

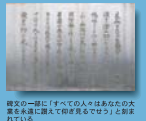
水を制御することがいかに難しいことであるか。平成大堰の右岸に建つ国交省山国川河川事務所中津出張所は、河川PRを兼ねてフジルームを市民に開放。川のことが、ひと目でわかるパネルが部屋いっぱいに。NPO法人豊前の国建設倶楽部の女性たちや川を夏休みの宿題学習にする子供たちの明るい声が響いていた。

河川用排当の吉田誠係長は言う。「河川だけではダメなんです。日田の県西部森林管理事務所と協力して植林にも取り組んでいます」と。川の水は源流の森林がつくり出しているのですからと付け加えた。数年前、河口の小祝の漁師たちが上流の山国地区で植林をした話を思い出した。植林の輪は年々広がっていると言う。

山国川右岸、山国大橋のたもとに若松常一郎の胸像が、川面をやさしく見つめるように建っている。昭和35年12月、66歳でこの世を去る。黄綬褒章、勲六等瑞寶章の栄誉をたたえ、中津市民の浄財による若松顕彰会が、命の恩人に感謝を込めて建立したものだ。碑文の裏面に「…人々に希望と勇気を与え万難を排して…独力よく巨額の私財を投じ、建設推進の人柱となり再興の礎石を築いた。偉業を讃え「山国の護り」とする。とあった。

国土交通省山国川河川事務所
中津出張所の吉田係長

若松舜兒・千里夫妻



碑文の一部に「すべての人々はあなたの大業を永遠に讃えて仰ぎ見るべでせう」と刻まれている

参考文献
◎山国川・新たなる流域連携に向けて
（木ノ下勝次　中津下毛地域づくりネットワーク
推進協議会豊前の国建設倶楽部）
◎ふるさとの自然と文化（添井勝義著）
◎川はながれている（倉山和子著　講談社）
◎鎮市神社と大井手堰（湯屋庄太郎）
◎大地の川・魅れ日本のふるさとの川
（関正和著　草思社刊）
◎大分工事事務所65年のあゆみ（国土交通省）
◎九太第07号（1975年4月　九太懇話会）
◎コモン　アクセス（1997年7月1日号）
◎県のパイオニア・若松常一郎（読売新聞
1964年10月20日付け）
◎大分県歴史人物辞典（大分合同新聞社）

Tsuneichiro Wakamatsu

A Locus of 先人の軌跡 Predecessor